

110×70mの広さを持つ世界一美しいグランプラス広場は2年に一度、8月に「花のカーペット」が広場に敷かれる。

古くから「ヨーロッパの十字路」と言われてきたベルギー。最近ではEUの本部が置かれたことでも、その地位が変わっていないことを証明した。その首都ブリュッセルに、美しさ世界一と称される広場「グランプラス」がある。ゴシック様式の建物に囲まれ、中世のたたずまいを残したこの広場は2年に一度、ペゴニアの花で埋め尽くされる。今も人々はこの広場を愛し、生活の一部になっている。

撮影 中塚 裕
文 酒井 新

「花の広場」物語



EU本部のある首都ブリュッセルの人口は約100万人。広場には毎日花市が立ち、日曜日には小島市で賑わう。

ヨーロッパの広場のどこにもいて、広場巡りの楽しみの脇役といえる街頭画家が、似顔絵や風景を描いて売っている。

高さ96mの鐘楼のある市庁舎のバルコニーから、「花の広場」を俯瞰する見物客の列は、一日絶えることなく続く。



PRESIDENT 1999.6



PRESIDENT 1999.6



上側/約70万本のペゴニアの花で作られた花のカーペットの命は短い。3日間のフェスティバルを終えると、いつもの石畳に戻る。

上/「星の家」の下にある14世紀の英雄「セルクラースの像」は黄金色に輝く。この像に触れると幸福がもたらされるという。



左2点/中世の面影を残す広場でひと休み。世界的に有名な小便僧の像も、グランプラスのこの広場からほど近いところにある。1695年にはフランス国王ルイ14世の命令で砲撃され、破壊された広場は、その復元に4年の歳月を要した。



「ブラバン公の家」から見た広場は、市庁舎(左手)、ギルドハウス(中央)、王の家(右手)などのゴシック建築の建物が四囲を囲む。

4月から10月まで、夜には音楽と光のショーで、広場全体が壮麗な劇場となり、昼間とは違った美しい貌を見せてくれる。



意

外に聞こえるかもしれないが、ベルギーという国はアメリカより若い。独立宣言が発せられたのは、一八三〇年のことだから、また建国一七〇年足らずという計算になる。

しかし、それ以前にこの土地が無人であり、歴史がなかったのかといえは、もちろんそうではない。むしろ逆だ。

紀元前にさかのぼる昔から、さまざまに民族がこの土地を目指し、流血を

繰り返して覇権を争い、勝者はそのたびに頑強な都市を築いてきたのだった。

まずケルト人が来た。カエサル率いるローマも来た。やがてフランク族が来、次いでブルゴーニュ公の支配が始まった。スペインが統治し、のちにオーストリアの、やがてフランスの、そしてオランダの統治が行われた。

逆に言えば、この土地を巡る争いはそれほどに激しく、つい一七〇年前まで、容易に取捨がつかなかったということになる。近代国家として独立を宣言したときですら、公用語は二つ用意され、母国語を異にする人々の間では、対立が今もくす



下/旅行者で賑わうイロ・サクレは、ブリュッセルの人気スポット。海鮮レストランの店先には海の幸が山盛り飾られ、客を呼び込む。

上/グランプラス広場には、イロ・サクレ地区の夜の賑わい。電飾も華やかな狭い路地の両側にはレストランが軒を並べている。



左内/ベルギー人の大好きな料理に、北海道産の白ワイン煮のムール貝と魚介を盛り合わせた「海のフルーツ」がある。

左外/「ブリュッセルは一人あたりのレストランの数が世界一」とガイドブックに書いてあるほど、レストランやカフェの数は多い。



こちらで高貴なものが、あちらでは何の価値もなく、向こうで命と大事にするものが、ここでは振り返られもしないというなら、信じられるのは、ただ言葉で取り決める約束だけだ。人は言葉を尽くして共存のルールを探り、合意を明文化し、ただ一つの憲法とするしかない。そのためには、討議し、約束し、ルールを告知し、逸脱を批判し、時には厳しく処罰する場所が必要になる。それこそが都市の広場だ。

今もブリュッセルの人々は、毎日のようにこの広場を訪れる。一人で、あるいは友人と語り合いながら、人々は建物の回廊を、何周も歩き続ける。グランプラスは、今もそのように愛され、二年に一度、美しい花で飾られる。

ぶる。その理由を知るためには、地図を一瞥するだけでいい。

ベルギーは、二つの豊かな大河に挟まれた沃野であり、また北海と地中海を結ぶ軸線上にあり、そして北方とラテンとゲルマンという三つの民族のせめぎ合う中央に位置する。まさに「ヨーロッパの十字路」、「ヨーロッパの心臓」。その首都ブリュッセルに、世界一美しいと讃えられる広場、グランプラスがあるのは、だから偶然ではない。

同じ神、同じ風習、一つの価値観の支配するところに、広場は生まれない。なぜなら、広場は、神と血と生活を異にする人々が、それでも共同して一つの都市を築き上げていくために、ルールを定め、それを執行するためにつくものだからだ。